

ハイデルベルク信仰問答より

問 67 御言葉と聖礼典とは、私たちの救いの唯一の基礎として、私たちの信仰を、十字架上のイエス・キリストの唯一の犠牲に差し向けるように、立てられているのですか。

答え 全く、その通りであります。なぜなら、聖霊は私たちの救いが十字架の上で、私たちのために捧げられたキリストの唯一の犠牲に根差していることを、福音書で教え、聖礼典によって証している(ローマ 6:3、I コリント 11:26)のであります。

ここでは「御言葉と聖礼典」の役割が教えられています。問 65 の学びの中でふれましたように、「聖霊の働きかけは福音の説教を通してもたらされる」のであって、〔原則として〕福音を語る人のことばを通して聖霊が人の心に働きかけるということです。よって、順序としては「御言葉（説教）」は常に「聖礼典」に対して優先されることとなります。しかし、そのような順序があることを念頭に置きつつも、本問答の問いでは「御言葉と聖礼典」がセットになって「救いの唯一の基礎」と言われています。ここには、両者は切っても切り離すことができないほどの密接性があることを伝えようとしている著者の思いが窺えます。「聖礼典」（すなわち「洗礼」と「聖餐」）を単なる儀式として無機質なものとするわけにはいかないのです。むしろ、御言葉が語られ、それが聴衆の心に受肉したことが、今度は目に見える形で体現されるものとして、より確かなものとするために聖礼典は執行される。礼拝の二つの山場は説教と聖餐と言われますが、これらは相互不可分のものとして大切にされなくてはなりません。

問 67 は「問い」の中でも充実した内容が呈示されています。両者には「**私たちの信仰を、十字架上のイエス・キリストの唯一の犠牲に差し向けるように**」という目的があるというのです。説教を聞くときにも、洗礼を受けるときにも、聖餐にあずかるときにも、主イエスが自分のために尊いのちを捨ててくださったこと、それによって私が罪より贖われたことを心に刻む必要があります。しかし、この三者には与えるインパクトという意味で役割の違いがあることも覚えておきたいと思います（※奥村のイメージ）。

① 説教

毎週継続的に語られること／聞くことにより、福音の論理を体系的に理解し、聖書が如何に一貫したことを語っているか、神がどんなに人間を一人びとを愛しておられるかを知ることができます。福音を聞き続けると、心の土壌がだんだんと柔らかくされていき、あるところで蒔かれた種が芽を出します。そのタイミングは早いこともあれば、時間をかけて効果が現れてくることもあります。不思議なことは、説教は基本的に信者に向けて語られているものであるにも拘らず、未信者の方にとっても有効であるということです。

② 洗礼

人が新しく生まれ変わったことを目に見える形で表現する手段であり、人生でただ一度限りの特別な「聖礼典」です。この「一回性」は「義認」との関わりが強く、罪の赦しが信じる瞬間に与えられることと深く関わっています。その人にとって二度と経験することはない儀式であるだけに、自身にも会衆にも、与えるインパクトは最も強いでしょう。

③ 聖餐

罪より贖われたことを、忘れやすい私たちの心に刻み続けるために主イエスが用意してくださった手段です。聖餐式が執行される度に、主イエスと信者の関係は更新され、より堅固に、密接に、不可分離のものとなっていきます。この「継続性」は「聖化」との関わりが強く、信者の内に宿ってくださった聖霊がその人を絶えず造り変え続けておられることを表現しています。洗礼に比べてインパクトは薄くはありますが、その時間的な長さからしても、一瞬熱して消えてしまう信仰とならないよう働き続ける聖霊の御業を表していると見ることができます。

御言葉を聞くときにも、聖礼典にあずかるときにも、常に「主イエスの十字架の犠牲」を中心に据えていたいと思います。